

沖縄キリスト教学院大学自己点検・評価・改善委員会
(編・著)

2009年度 後期

学生による授業評価報告書

巻頭言

第1章 授業評価の概要

第2章 科目・クラス別の評価

第3章 自由記述による授業評価

付録 第2回卒業生による大学満足度

沖縄キリスト教学院大学

2009

Introduction to the Term-end Questionnaire Data from the Fall Term 2009

Randy Thrasher, President

As in previous terms, this report discusses the individual comments that the students wrote and the data from the student responses to the 17 questions on our term-end questionnaire. The comments are only from the students who choose to write something, but the data from all the students in the classes offered in the Fall Term 2009.

The comments concerning the classes, teachers, and the education of our school in general were almost all very positive. Most noticeable were the comments praising teachers for their attention to the needs of individual students. There were a few requests for an ATM on campus and the usual complaints about the lack of adequate parking at peak use hours. We have studied the possibility of installing an ATM, but the banks do not feel that there are a sufficient number of customers to justify the expense of installing and maintaining such a machine. We have also increased the number of parking spaces and allowed the students to use all of the parking on the campus, but some must still use the off-campus lots during peak periods. I believe that this is the source of the complaints the students wrote. But apart from these, the student comments were quite positive. Except for two areas, the same can be said of the questionnaire data. In almost all areas, the students continue to rate the education we provide quite highly.

As I mentioned above, the questionnaire data from all the classes taught in the fall term is pooled. This means that it includes the responses of students taking both skill courses and specialized courses. And all students, from freshmen to seniors, filled out the questionnaire. In one sense this broad coverage is good, but it means that sometimes the data is difficult to interpret. For example, I think the combining of data from all sorts of classes is the reason for the differences in the responses to questions 4 and 17 from the responses to the other questions. Question 4 asks if the class was easy to understand. It is obvious that an introductory class should be easy to understand, but a high level specialized class may not be easy to understand. And this is probably a good thing. Such a class should challenge the students to work on their own until they can fully understand what the professor is teaching. So both introductory classes and advanced specialized classes can be well taught but have quite different responses to question 4.

The responses to question 17 are even harder to understand. This question asks how willing the student is to take another course taught by the same professor.

The problem is that, in a Liberal Arts college such as OCU, most introductory courses serve the purpose of giving students an overview of that field of study. Students then use what they learned about that field to decide if they want to study more in that area. So a course could be very well taught but, if the student has decided to study in another area, it would be unlikely that he or she would want to take another course from that professor. This could be one of the causes of the different data for question 17.

It is also difficult to decide if there has been meaningful change in the results from 2007 to 2009. As the explanation of the data on pages 14 to 18 indicate, if we look at the data from a statistical point of view, we can claim that there has been a small change from year to year. However, if we consider the data from the perspective of using it to make changes in our education and planning, we must ask if changes this small should be the basis of future planning. The line graphs comparing the responses for each question from 2007 to 2010 seem, at first glance, to indicate a large change, but if you look closely at the scale on the left hand side of each graph, you will see that the mean differences are quite small. With the exception of questions 12 and 13, the difference over the three years is less than 0.1 (on 5 point scale). In the data from the Spring Term there were 6 questions with a difference of 0.1 or greater. I think that this shows that the safest conclusion to draw is that there has not been much significant change in the results over the past three years.

This means that what we are doing well, we continue to do well, but the areas of weakness remain to be improved. The teachers are generally performing well but they need to follow the syllabus more closely. The students are still not doing an adequate amount work outside of the classroom. Improving performance in this area is a joint faculty student task and may involve the development of practice material for skill courses and increasing the number of reports students must make in specialized courses. It is also obvious that we need to improve some questions on the questionnaire and perhaps use more data about the type of class and the year of the students taking it. This would allow us to examine skill courses and specialized courses separately, as well as compare the responses of various groups of students. We cannot change the questionnaire until the 2011 academic year, but I hope we can do a better job of analyzing the data we get in the two terms of the 2010 year.

In closing, I would like to thank all the faculty and staff who worked together to collect and analyze the data presented here. My special thanks goes to Professor Yoshitake Oshiro for doing the statistical analysis and writing up this report. We have depended on his expertise and hard work for many years and I am grateful for his crucially important service to our school.

2009 年度後期授業評価巻頭言

学長 ランドルフ スラッシャー

先学期と同様、本報告書は、学生が記述した個々のコメントについて、また、アンケートの 17 の質問項目への回答から得られたデータについて言及しています。コメントは、記述を選択した学生のみのものでありますが、データは、2009 年度後期に開設されたクラスの受講生全員から得たものです。

授業、先生方、本学の教育に関するコメントは、大方好意的なものとなっています。中でも注目するのは、先生方の個々の学生のニーズへの対応が好評を得ていることです。一方、キャンパスに ATM を設置する要望や、駐車場のスペース問題（時間帯によりますが）への苦言もあります。学校側は、ATM の設置の可能性を検討したのですが、銀行側は、本学には、ATM を維持するだけの顧客数が無いと判断しました。駐車場に関しては、スペースを拡大し、キャンパス内の駐車場は、全て学生に提供しています。しかし、時間帯によっては、キャンパス外駐車場を必要としている学生もいるのは確かです。このことが、学生からの苦言の原因となっていると思います。その他についての学生のコメントは、好意的です。ただし先の二つは除きます。データでも同じ結果が出ています。ほとんど全ての分野に於いて、学生は、本学が提供する教育を高く評価しています。

上記のように、後期に採った全クラスからのアンケート上のデータは、一括集計となっています。即ち、スキル科目や専門科目両方への回答を包括しています。1 年次から 4 年次までの全ての学生が、質問に答えています。このような広範囲に渡っての集計は、良い面もあるのですが、時には、解釈が難しいものとなります。例えば、全クラスのデータを十把ひとからげにしますと、質問 4 と質問 17 への答は、他の質問への答えと質が異なってしまふこととなります。質問 4 は、「先生の授業は、とても分かりやすかった」（設問）と聞いています。「入門」を学ぶクラスであれば当然易しいはずですが、しかし、レベルの高い専門科目の授業だと理解するのはそう易しくないはずですが、恐らく、それはそれでよいです。このような授業は、学生たちに学びへのチャレンジを与えます。教授が何を教えようとしているのか、学生自ら十分に理解するよう努めなければなりません。そう言う訳で、導入の授業も高度な専門的授業もいい授業に違いありません。しかし、質問 4 への答えは、答え自体かなり異なっています。

質問 17 への答えは、その解釈が更に難しいものとなっています。ここでは学生に「私は、この先生の別の科目も受講したいと思います」（設問）と問うています。ここでの問題は、本学のようなリベラル・アーツの大学では、入門の授業では、それぞれの分野の概論を学ぶのが目的となっていることです。学生は、その学びで得たものを基に、同じ分野での学びをもっと深めたいか否かを定めることとなります。それで、授業はどんなに素晴らしくても、もし学生が、別の分野を学びたいと決めたのなら、同じ先生の別の授業を取りたい

ということにはなりません。このことは、質問 17 に関する答えの差を引き出すデータ上の原因となっています。

2007 年から 2009 年にかけて変化が見られますが、それが有意なものなのかどうか決めかねます。14 ページ～18 ページのデータの説明では、統計的に見ますと、年ごとに僅かですが変化があるとしています。しかし、このような僅差を示すデータを基に、本学の教育や計画を変えうるかとなると、よく考えなければなりません。2007 年から 2010 年にかけての折れ線グラフは、視覚的には変化を示していますが、注意深く、各グラフの左の目盛りを見れば、その平均の差異はとても小さいものであることが分かります。質問 1 2 と質問 13 は例外として、他の質問は過去 3 年間 5 段階評価で 0.1 より小さいものとなっています。前期のデータをみますと、0.1 あるいはそれ以上の差を持つ質問が 6 個あります。データの妥当な解釈としては、過去 3 年、大きな違いを見る有意な差は無いという結論になります。

上記のことは、これまで旨く行っていたものは継続し、弱点を持つものは改善が残されていることを示しています。先生方は一般的に良い授業を行っているといえますが、もっとシラバスを活用する必要があります。学生は、授業外学習の量がまだ充分ではありません。この授業外学習を改善するためには、教師と学生が一緒に取り組む必要があります。演習科目の練習教本を開発したり、専門科目ではレポートの数を増やしたりすること等です。アンケートのいくつかの質問は、明らかに、再検討が必要です。より多くの授業種類別や年度別のデータを用いる必要があります。そうすれば、演習科目と専門科目を別々に調べることが可能になりますし、異なるグループの学生の答えを比較することも可能です。現在使用の質問 17 項目は、2011 年度まで変えることが出来ません。2010 年度前期・後期の双学期におけるデータを別の視点で分析出来ないかと、その方法を模索している最中です。

最後に、この報告書を作成するに当たり、データ収集や分析にたずさわった全ての教員・職員の方々に感謝いたします。特に、大城亘武教授はデータの分析と執筆に貢献してくださいました。我々は、ここ何年も彼の専門的知識と惜しみない勤労に頼ってきました。大城亘武教授の本学への尊いご奉仕に衷心より感謝申し上げます。

沖縄キリスト教学院大学

自己点検・評価・改善委員会委員

(2009年度 後期)

スラッシャー, R. H. (委員長・学長)

山里 恵子 (委員・人文学部長)

金 永秀 (委員・宗教部長)

城間 仙子 (委員・教学部長)

上原 明子 (委員・入試部長)

高崎 正名 (委員・キャリア開発部長)

仲地 弘善 (委員・図書館長)

伊佐 雅子 (委員・英語コミュニケーション学科長)

仲門 勇市 (委員・事務局長)

評価委員会

(2009年度 後期)

スラッシャー, R. H. (委員長・学長)

山里 恵子 (委員・人文学部長)

大城 亘武 (委員)

近藤 功行 (委員)

本浜 秀彦 (委員)

浜川 仁 (委員)

第1章

学生による授業評価概要

第1章 学生による授業評価概要

はじめに

今回の学生による授業評価報告書は、2009年10月から2010年2月にかけての学期で開設された全77科目、98クラスについてのデータを分析したものである。評価活動は評価委員である大城亘武教授により、2010年1月に実施された。本章では全てのクラスを一括して分析する。すなわち、クラスサイズの大小は問わず、回収された2550件の評価票について統計的に分析する。

2 評価項目ごとの度数分布

全回答票を評価項目別に一括して度数分布を求めた。評価は5段階法による。評価は17の視点(項目)から行っている。(調査票は章末に掲げてある) そのうち16項目は5段階法で評定し、1項目は6段階法である。評価の基準はつぎの通りである。

- 5 : 非常にそう思う
- 4 : そう思う
- 3 : どちらとも言えない
- 2 : そう思わない
- 1 : 全くそう思わない

なお、Q15については次の様にしてある ;

- 5 : 3時間以上
- 4 : 2時間くらい
- 3 : 1時間くらい
- 2 : 30分くらい
- 1 : ほとんどしなかった

Q16についてはつぎのようにしてある ;

- 5 : 秀
- 4 : 優
- 3 : 良
- 2 : 可
- 1 : 不可
- 0 : わからない

以下に、今回の結果について述べる(分布表Q1~Q17参照)。まず、Q1~Q17について凡例を述べる。表中の「度数」は、1~5(または0~5)のそれぞれに評価した人数である。「パーセント」は、その度数の全2550延べ件数に対する比率を示している。「有効パーセント」は、「システム欠損値」除いた延べ件数に対する比率で

ある。「システム欠損値」とは、無回答のことである。「累積パーセント」は、有効パーセントを積み上げたものである。

なお、本文では有効パーセントの数値について述べ、その際少数第1位を四捨五入して示すことにする。

Q1からQ17の表は、それぞれ評価項目Q1からQ17の評価結果について度数分布を示す。比率は「有効パーセント」の数値を用いる。また、本文中では小数第1位を四捨五入して示す。

Q1「学期の初めに授業の目的及びこの授業での学生のなすべきことについて明確に説明しました。」に対して75%の評価者が「5」（非常にそう思う）、と評価している。「4」（そう思う）、が18%であり、「5」「4」両評価を合算すると92%になる。授業への方向付けは、極めて高いに達成を示していると考えられる。もっとも授業の目的の説明は、「講義要項」に明記されているため、授業中にあらためて説明するまでもないと考えられる。

Q2「宿題・試験・成績評価の仕方などについて説明がはっきりしていました。」については72%が「5」（非常にそう思う）と評価している。「4」（そう思う）評価は18%である。両者で90%である。

Q3「先生は、授業について熱意がありました。」は、教員の授業展開の評価である。「5」評価の比率が80%である。すなわち学生たちは本学教員が授業に「熱意」あり、と評価している、ことになる。

Q4「授業は、とてもわかりやすかった。」は受講生に対応した授業が実施されているかを調べるものだが、「5」評価した者の比率は64%である。「1」評価「全くそう思わない」（4%）、「2」評価「そう思わない」（4%）を合算すると6%を数える。分かる授業が展開されていることを示唆する結果であるが、6%の者が否定的な評価をしていることは留意が必要であろう。

Q5「授業の準備はよくできていました。」で、教材研究がしっかり行なわれているかを推測することができる。「5」評価は75%である。満足すべき結果であろう。「5」評価と「4」評価を合算すると90%に達する。

Q6「学生の理解・興味を深めるためにいろいろ工夫をしていました。」も教材研究に関連する評価項目である。70%が「5」評価、18%が「4」評価であるが、「1」「2」を合算した比率が4%ほどになり、一部に不満を表明する厳しい目もある。

Q7「授業は時間どおりに始まり、時間どおりに終わりました。」は、時間管理の問題である。「5」評価は77%である。「4」評価が15%、両者合算すると92%になる。「1」評価と「2」評価の合算は3%である。

Q8「わからないことを質問できる機会や工夫がありました。」は、学生の授業参加を促しているかどうかを評価するものである。「5」評価が72%である。3%ほどの学生が低い評価をくだしている。ところで、教員の学生への質問は「質問の機会」であ

ろうか。また、「何か質問はありませんか」と質問を促すのは「質問の機会」を作ることになるだろうか。あらかじめ質問の時間を設定することなのだろうか。この点について、留意する必要がある。

Q 9 「授業を乱す行為（私語・携帯電話（メールを含む）・居眠り・中座等）に対して適切に対応していました。」は、教員のクラス管理技量を問うものとなっている。「私語・居眠り・中座」を授業妨害の三悪だとすれば、その悪弊を排除する姿勢が問われていることになる。72%が「5」と評価している。「5」評価と「4」評価を合算すると89%になる。「1」および「2」評価をして、対処が不適切と考える者が3%ばかりある。

Q 10 「この先生のこの科目を他の学生や他大学の学生にも受講を薦めたい。」は、授業への満足度の一端を示すだろう。「5」評価が64%、「1」および「2」評価はそれぞれ1%、2%であった。「5」と「4」の合算では85%になる。かなり満足しているようである。

Q 11 「私は、この授業に熱意を持って取り組みました。」は、学生個人の自己評価である。62%が「5」評価をしている。「4」評価と合算すると85%になり、熱意の高さが示されている。

Q 12 「授業の学習にあたり、シラバス（講義要項・学習計画）を参考にしました。」は、学生の授業への熱意の具体的な例証となる。熱意があれば絶えずシラバスを見ながら学習を行なうであろう。50%が「5」評価である。「4」評価が21%、両者で71%である。「1」「2」評価を合算すると11%である。シラバス活用をどう進めるか議論が必要である。

Q 13 「授業中、私語や携帯電話（メール等）、中座など授業を乱すような行為はしませんでした。」は、学生自身の授業参加状況を尋ねるものである。評価「5」としたものは、67%である。「4」評価は20%であり、「5」評価と「4」評価を合算すると87%ほどになる。「1」評価が1%、「2」評価が2%、合算すると3%である。

Q 14 「この授業で遅刻・欠席はほとんどありませんでした。」によって、授業への「真面目な取り組み」ないし、学ぶことの本気度が推測できるだろう。「5」評価は63%、「4」評価は20%であり、8割以上が本気で学んでいるということであろう。「1」評価は1%、「4」評価は5%となっている。

Q 15 「この授業のために週当たりほぼ次の時間、宿題や予習などをしました。」は、授業への取り組みの強さを示すだろう。「1」評価が32%であった。「1」評価とは授業時間以外での学習を「ほとんどしなかった」ことを示す。「2」評価（30分くらい）の評価の比率は32%である。合算すると54%である。ある程度予習・復習等をしていると解釈できる「3」評価は24%となっている。3時間以上の学習をする「5」評価は4%、2時間くらいの「4」評価は8%である。両者の合算では12%である。学習時間に関する限り学生たちの不勉強ぶりは明白である。なお、この評価項目では6%の学生が「無回答」であった。この比率はおそらく短い学習時間を隠す自己防衛的な回答かもしれない。

Q16「この授業を全体的に評価してください。」は、授業クラスの総合的印象評価である。「5」評価をしたものの比率は55%である。「4」評価は27%である。「4」と「5」評価の比率を合算すると約81%となる。まあまあ及第点であろうか。しかし、「1」評価と「2」評価を合算した比率が5%であるのは注意が必要である。

Q17「この先生の別の科目も受講したいと思います。」は、受講科目の授業が今後の授業に波及する効果を示唆するものであろう。今回の授業に満足度が高ければ他の科目へも誘因として働くと考えられるからである。「5」評価の比率は67%、「4」評価が18%である。85%ほどが一応この科目の担当者の授業に興味関心を持っていたであろうことが示唆される。一方「1」および「2」評価を合算した比率は5%あり、これらは授業内容あるいは授業担当者への失望の表れだと解釈できよう。

Q1授業の目的

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	11	.4	.4	.4
	2	27	1.1	1.1	1.5
	3	158	6.2	6.2	7.7
	4	438	17.2	17.2	24.9
	5	1914	75.1	75.1	100.0
	合計	2548	99.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.1		
	合計	2550	100.0		

Q2成績評価方法

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	16	.6	.6	.6
	2	42	1.6	1.6	2.3
	3	192	7.5	7.5	9.8
	4	455	17.8	17.9	27.7
	5	1843	72.3	72.3	100.0
	合計	2548	99.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.1		
	合計	2550	100.0		

Q3先生の熱意

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	12	.5	.5	.5
	2	24	.9	.9	1.4
	3	120	4.7	4.7	6.1
	4	354	13.9	13.9	20.0
	5	2036	79.8	80.0	100.0
	合計	2546	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	4	.2		
	合計	2550	100.0		

Q4わかりやすい

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	49	1.9	1.9	1.9
	2	94	3.7	3.7	5.6
	3	247	9.7	9.7	15.3
	4	530	20.8	20.8	36.1
	5	1627	63.8	63.9	100.0
	合計	2547	99.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	.1		
	合計	2550	100.0		

Q5準備よい

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	19	.7	.7	.7
	2	50	2.0	2.0	2.7
	3	183	7.2	7.2	9.9
	4	394	15.5	15.5	25.4
	5	1902	74.6	74.6	100.0
	合計	2548	99.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.1		
	合計	2550	100.0		

Q6理解興味 of 工夫

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	38	1.5	1.5	1.5
	2	69	2.7	2.7	4.2
	3	219	8.6	8.6	12.8
	4	450	17.6	17.7	30.5
	5	1772	69.5	69.5	100.0
	合計	2548	99.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.1		
	合計	2550	100.0		

Q7時間どおり

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	21	.8	.8	.8
	2	51	2.0	2.0	2.8
	3	129	5.1	5.1	7.9
	4	389	15.3	15.3	23.2
	5	1955	76.7	76.8	100.0
	合計	2545	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	5	.2		
	合計	2550	100.0		

Q8質問の機会

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	24	.9	.9	.9
	2	59	2.3	2.3	3.3
	3	207	8.1	8.1	11.4
	4	426	16.7	16.7	28.1
	5	1828	71.7	71.9	100.0
	合計	2544	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	6	.2		
	合計	2550	100.0		

Q9授業妨害へ対処

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	28	1.1	1.1	1.1
	2	56	2.2	2.2	3.3
	3	286	11.2	11.2	14.5
	4	552	21.6	21.7	36.2
	5	1623	63.6	63.8	100.0
	合計	2545	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	5	.2		
	合計	2550	100.0		

Q10薦めたい

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	46	1.8	1.8	1.8
	2	66	2.6	2.6	4.4
	3	268	10.5	10.5	14.9
	4	451	17.7	17.7	32.7
	5	1714	67.2	67.3	100.0
	合計	2545	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	5	.2		
	合計	2550	100.0		

Q11熱意を持って参加

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	19	.7	.7	.7
	2	53	2.1	2.1	2.8
	3	299	11.7	11.7	14.6
	4	596	23.4	23.4	38.0
	5	1581	62.0	62.0	100.0
	合計	2548	99.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.1		
	合計	2550	100.0		

Q12シラバス参考

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	124	4.9	4.9	4.9
	2	159	6.2	6.2	11.1
	3	457	17.9	17.9	29.1
	4	545	21.4	21.4	50.5
	5	1261	49.5	49.5	100.0
	合計	2546	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	4	.2		
	合計	2550	100.0		

Q13授業を中座しない

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	13	.5	.5	.5
	2	55	2.2	2.2	2.7
	3	267	10.5	10.5	13.2
	4	515	20.2	20.2	33.4
	5	1697	66.5	66.6	100.0
	合計	2547	99.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	.1		
	合計	2550	100.0		

Q14遅刻欠席ない

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	24	.9	.9	.9
	2	94	3.7	3.7	4.7
	3	315	12.4	12.4	17.1
	4	517	20.3	20.4	37.5
	5	1584	62.1	62.5	100.0
	合計	2534	99.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	16	.6		
	合計	2550	100.0		

Q15予習復習時間

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	770	30.2	32.0	32.0
	2	772	30.3	32.1	64.1
	3	571	22.4	23.7	87.9
	4	187	7.3	7.8	95.6
	5	105	4.1	4.4	100.0
	合計	2405	94.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	145	5.7		
	合計	2550	100.0		

Q16全体的評価

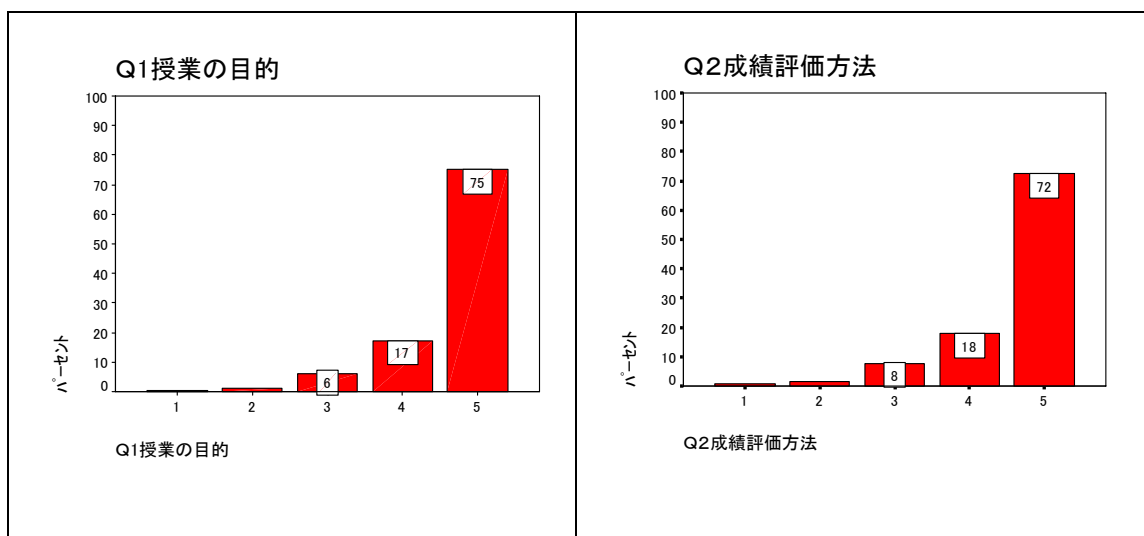
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	26	1.0	1.1	1.1
	2	98	3.8	4.0	5.0
	3	335	13.1	13.6	18.6
	4	661	25.9	26.7	45.3
	5	1352	53.0	54.7	100.0
	合計	2472	96.9	100.0	
欠損値	0	34	1.3		
	システム欠損値	44	1.7		
	合計	78	3.1		
合計		2550	100.0		

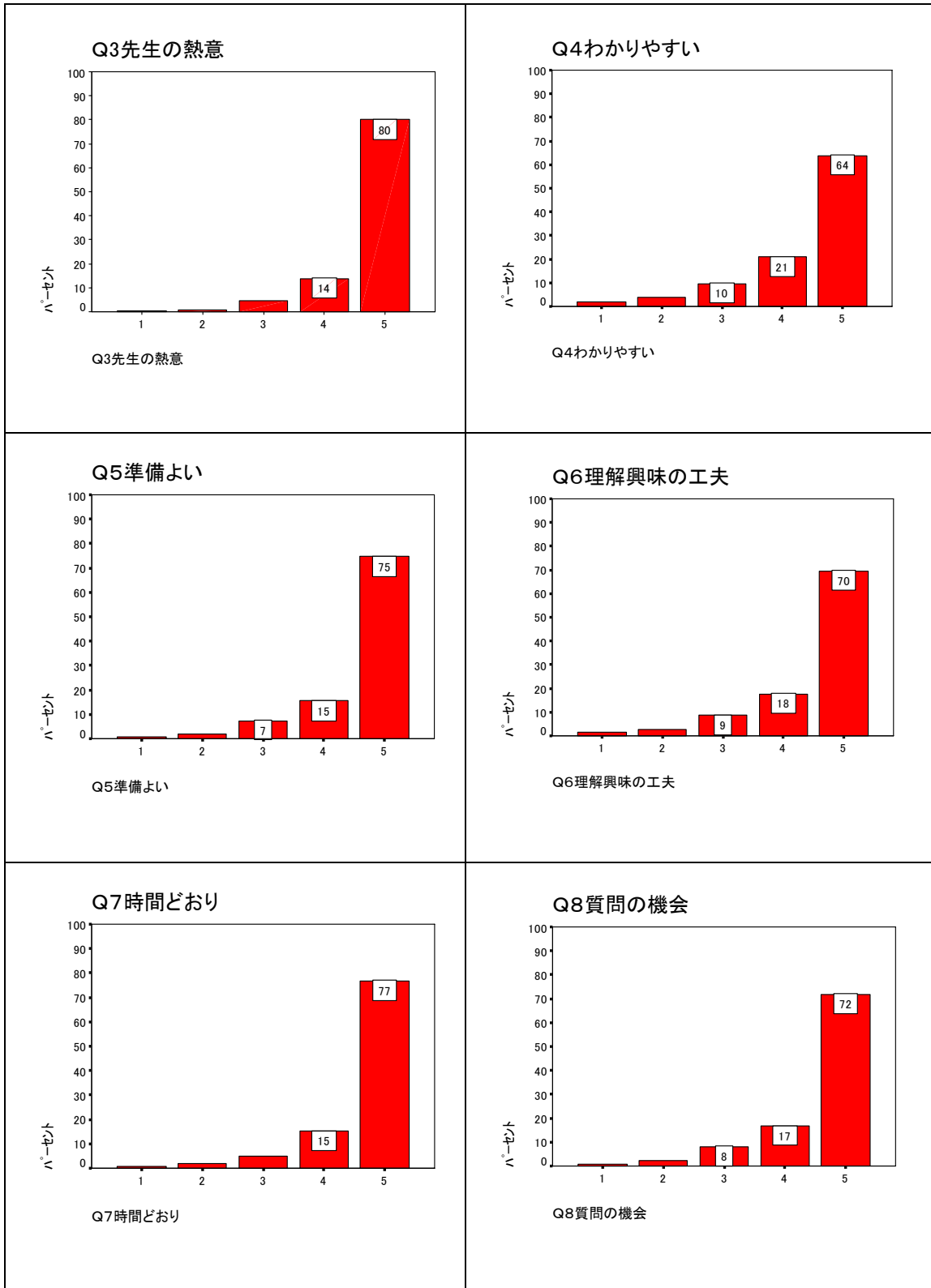
Q17別の科目も受講したい

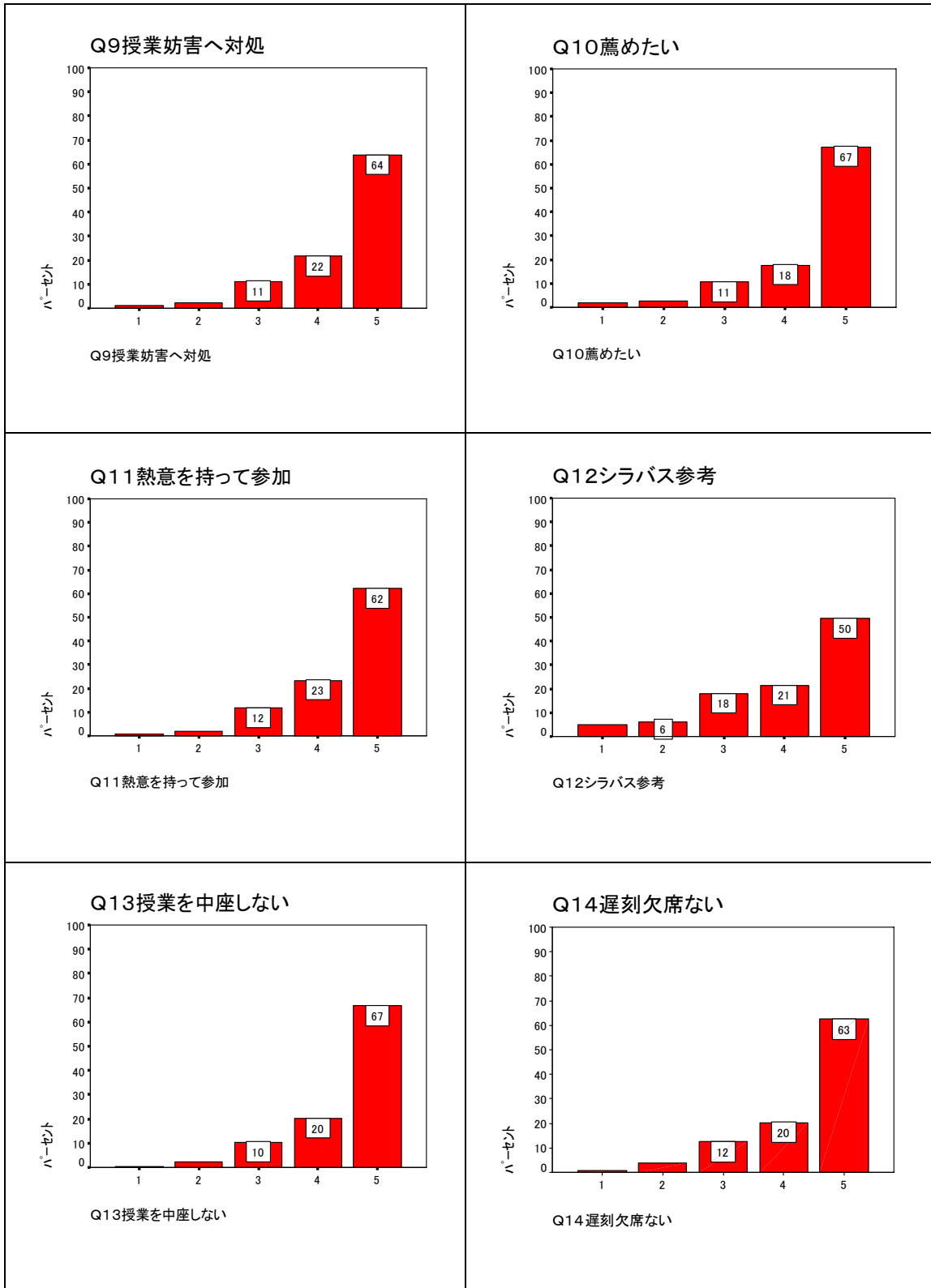
		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1	71	2.8	2.9	2.9
	2	60	2.4	2.5	5.4
	3	236	9.3	9.7	15.0
	4	438	17.2	17.9	33.0
	5	1638	64.2	67.0	100.0
	合計	2443	95.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	107	4.2		
合計		2550	100.0		

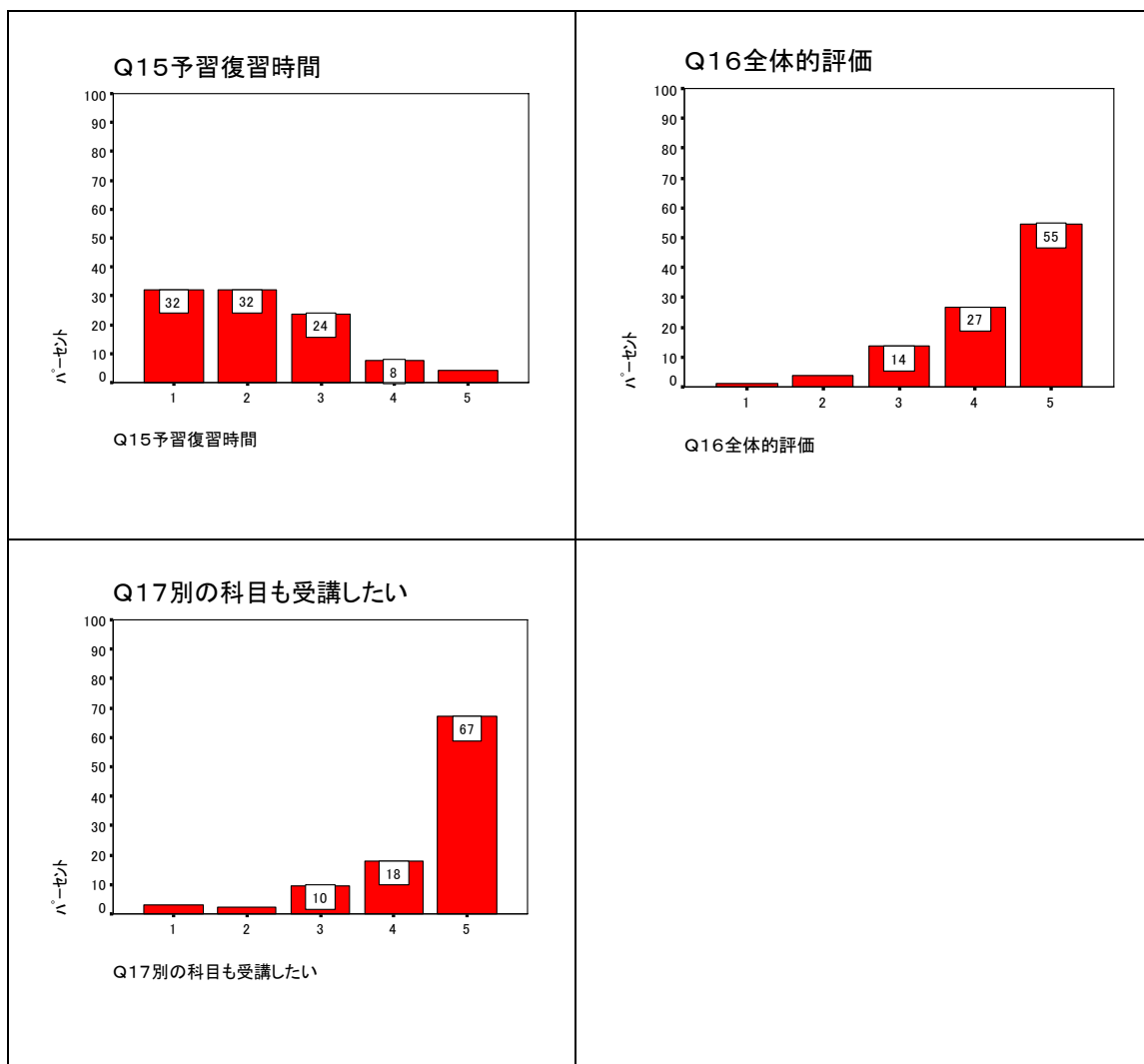
次に、度数分布を棒グラフにして掲げる。グラフ中で、囲みの数値は全体に対する比率である。教員に関する場合、すべて逆L字型をなし、良好な評価であることが分かる。すなわち、「5」評価が突出し、以下低い比率となった形状である。

学生に関する場合もほぼ逆L字の形状をなし、高い自己評価をしていることが分かる。ただし、明確ではないが、Q15「予習復習時間」が逆L字型になっている。









2 学生による授業評価の概要

客観評価は全17項目、すなわち授業担当者に対する評価9項目、学生自身についての評価5項目、授業そのものの評価3項目から構成される。各設問は1～5の5段階法である。値の高いほどよい評価である。これらのある文章に対する賛成・反対間隔尺度を用いて回答させるための尺度である、リッカートタイプの変数として扱った。なお、次の表でQ16「全体的評価」については、5段階に加え「わからない」を加えてある。ただし、演算の際には「わからない」としたものは欠損値として取り扱った。以下に、平均値の高い順に基本統計量を掲げた。すなわち、評価者の人数（度数）、最小値、最大値、平均値、標準偏差である。度数が評価票の枚数2550より小さいのは、無回答者があるためである。

Q15（予習復習時間）を除いて、全て4.0以上の値となっている。教員要因、学生要因、「評価」項目など、良好な評定結果となっている。

平均値の一番高いのはQ3「先生の熱意」の4.72である。教員の授業、教育に注ぐ熱意が高く評価されている。続いて平均値の高い項目は、Q1「授業の目的」の4.66、そしてQ7「時間通りに始まり、時間通りに終わる」の4.65である。Q5「準備よい」も4.60を超えている。

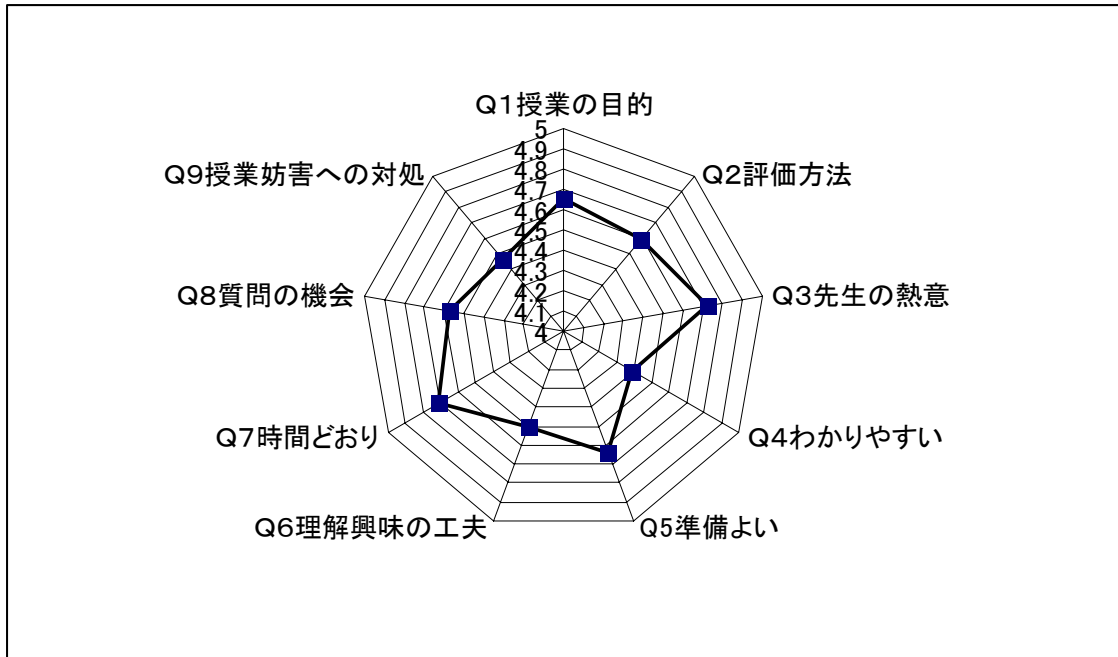
記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Q3先生の熱意	2546	1	5	4.72	.640
Q1授業の目的	2548	1	5	4.66	.682
Q7時間どおり	2545	1	5	4.65	.740
Q5準備よい	2548	1	5	4.61	.767
Q2成績評価方法	2548	1	5	4.60	.752
Q8質問の機会	2544	1	5	4.56	.813
Q6理解興味の工夫	2548	1	5	4.51	.874
Q13授業を中座しない	2547	1	5	4.50	.807
Q10薦めたい	2545	1	5	4.46	.912
Q9授業妨害へ対処	2545	1	5	4.45	.858
Q11熱意を持って参加	2548	1	5	4.44	.834
Q17別の科目も受講したい	2443	1	5	4.44	.967
Q4わかりやすい	2547	1	5	4.41	.943
Q14遅刻欠席ない	2534	1	5	4.40	.908
Q16全体的評価	2472	1	5	4.30	.920
Q12シラバス参考	2546	1	5	4.04	1.167
Q15予習復習時間	2405	1	5	2.20	1.105
有効なケースの数(リストごと)	2246				

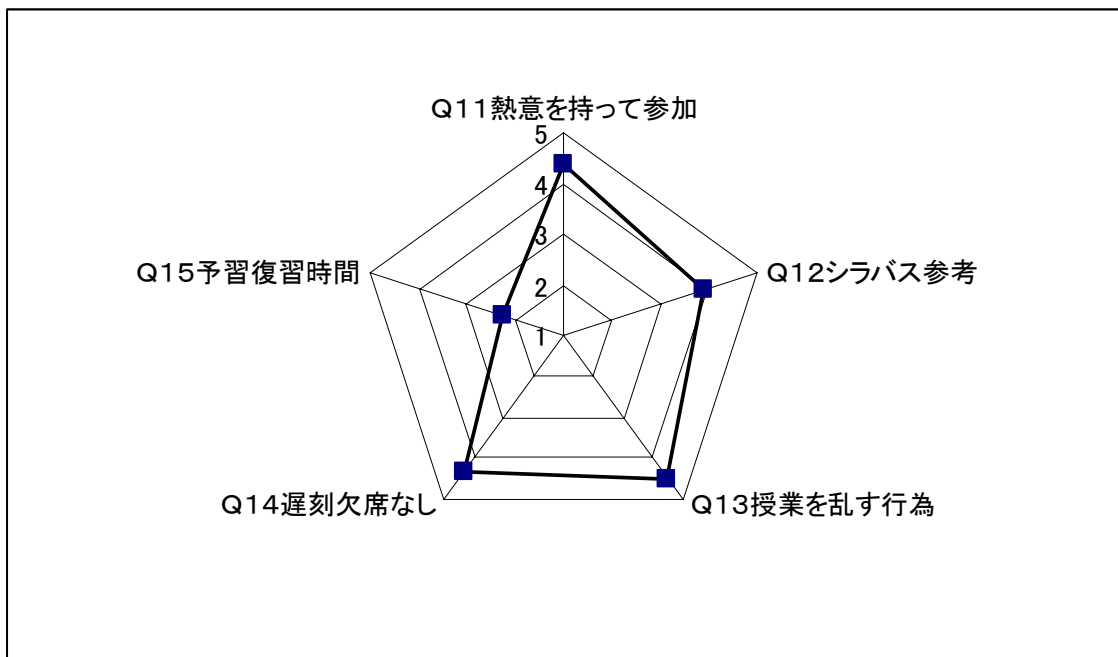
Q15「予習復習時間」の2.20が注目される。上で述べたように、「1」点台は「ほとんど学習しない」、「2」は「30分ぐらい」つまり30分前後の自学自習時間である。これが本学学生の実態である、ことを確認しよう。

3 観点別比較

各評価項目の評価の「1」～「5」を1点～5点に読み変え、これらをレーダーグラフ化して、次のページ以下に掲げた。Q1からQ9は、観点別の授業評価における教員要因である。目盛は4.0から0.1刻みで表してある。Q3「先生の熱意」の項目での評価が一番高いことがわかる。逆にQ3「わかりやすい」がもっとも低い評価である。大学全体としてどの観点で改善の必要があるのかが明らかであろう。すなわち「わかりやすい授業」と言うことになる。ところで、既に見たように該当するクラスの為の「予習復習の時間」の少なさが明らかになっている。このような状態で「わかりやすさ」を求めるのは如何であろうか。予習復習をしなくても「わかりやすい授業とは」。学生の授業に臨む態勢の弱さがあるのではないか。教員としてどのように対処するのが喫緊の課題であろう。



次に、学生要因について見る。Q 1 5「予習復習時間」のスコアの低さが注目される。すなわち、学習量が少ないということである。学生の側から見て授業時間以外に、自



学自習いわば予習復習しないでも成り立つ授業とはなにか。教員に授業の質が問われているのではないか。

4 自由記述による評価

自由記述による評価としては、1. 授業のよい点、2. 改善点、3. この科目や担当

者の授業方法についての感想・意見・印象、そして4. 学長へ（聞いてほしいこと）を設定している。ここでは学生による授業評価の趣旨が授業の改善であるので、「改善点」を中心に学生が何を「改善して欲しい」と考えているかを検討する。

それぞれの科目においては、その特性上、他の科目との授業のあり方が違うのは当然のことだが、ここでは、より多くのものをカバーしていると思われる「記述」を取り上げ、本学で行われている授業の一般的な改善点として注目したい。

まず、最初に注目したいのはクラスサイズについてである。本学は、少人数教育を謳い、そのようにクラスサイズをできるだけ小さなものにするよう努力しているのだが、「記述」によると、クラスの人数の多さを訴えている。その多さの不满に、「もっと一人一人にかかわって欲しい」や「先生の数に対して生徒が多い」がある。教員数においては、大学設置基準を十分に満たしているものの、学生は、更なるきめ細かい指導を要望していることが分かる。それぞれの教科の特質を再検討し、例えば、英作文や表現技法等は、徹底した少人数教育を行うよう改善する必要がある。

授業そのものについては、多くのコメントがあるが、「授業成立に必要な条件」の観点から改善点と思われるものに次のものがある。「先生の声が小さい」、「教室の大きさに対応すべくマイクの常設」、「スクリーン上の文字が小さく見づらい」、「スクリーンが暗い」、「授業のペースが速すぎる」、「説明不足」、「早口」。いずれも、授業の内容を伝えるべき手段としての欠点であり、改善を要する。

ところで、学生側の授業に対する不真面目さも伺える「記述」がある。「おしゃべり」、「宿題が多い」、「課題が多い」、「テストが多い」、「カンニング有り」、「英語での授業を日本語で説明して欲しい」、「1限目を5限目に移動して欲しい」等。これらの指摘から考えられることは、教員は、学生に「大学で学ぶ意義・目的」をもっと真剣に伝える努力が必要であるということである。その方法をFD等で検討し、良作を見出したい。

以上は、全科目を概括した改善点である。即ち、「少人数制の見直し」、「授業成立の基本的条件」、「学生の大学で学ぶ意義・目的の喚起」を今回の改善点と捉え、学校側は、それぞれを検討し、解決へ向ける努力を要することをここに記す。

科目クラスターごとの「記述」を取り上げることが出来れば、よりの確な改善点を拾うことが出来たであろうと思うが、それは、次の課題とする。

5 授業評価の経年比較

大学設置完成年度の2007年度から2009年度の後期の授業評価の経年比較を行う。客観評価項目のそれぞれについて、評価値の一元配置の分散分析を実施した。（次ページの表を参照のこと）。

表の右端列「有意確率」が.05より小さければ、年度間差があることになる。これによると、全17項目中13項目で年度間差が認められる。なお、1項目については5%水準では有意差はなかったが、10%水準では差が認められた（傾向性あり）。

分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
Q1授業の目的	グループ間	3.714	2	1.857	4.313	.013
	グループ内	3335.718	7747	.431		
	合計	3339.432	7749			
Q2成績評価方法	グループ間	4.664	2	2.332	4.429	.012
	グループ内	4076.798	7743	.527		
	合計	4081.462	7745			
Q3先生の熱意	グループ間	4.643	2	2.321	6.135	.002
	グループ内	2929.568	7742	.378		
	合計	2934.211	7744			
Q4わかりやすい	グループ間	6.996	2	3.498	4.142	.016
	グループ内	6540.765	7744	.845		
	合計	6547.761	7746			
Q5準備よい	グループ間	8.165	2	4.083	8.237	.000
	グループ内	3839.287	7746	.496		
	合計	3847.452	7748			
Q6理解興味の工夫	グループ間	5.292	2	2.646	3.822	.022
	グループ内	5363.840	7747	.692		
	合計	5369.131	7749			
Q7時間どおり	グループ間	3.762	2	1.881	3.886	.021
	グループ内	3746.579	7739	.484		
	合計	3750.342	7741			
Q8質問の機会	グループ間	4.804	2	2.402	3.914	.020
	グループ内	4749.960	7740	.614		
	合計	4754.764	7742			
Q9授業妨害へ対処	グループ間	3.976	2	1.988	2.954	.052
	グループ内	5208.809	7739	.673		
	合計	5212.785	7741			
Q10薦めたい	グループ間	.909	2	.455	.579	.561
	グループ内	6083.499	7745	.785		
	合計	6084.408	7747			
Q11熱意を持って参加	グループ間	7.696	2	3.848	5.638	.004
	グループ内	5286.860	7746	.683		
	合計	5294.556	7748			
Q12シラバス参考	グループ間	23.486	2	11.743	8.408	.000
	グループ内	10802.440	7735	1.397		
	合計	10825.926	7737			
Q13授業を中座しない	グループ間	.401	2	.201	.313	.731
	グループ内	4962.475	7745	.641		
	合計	4962.876	7747			
Q14遅刻欠席ない	グループ間	3.310	2	1.655	2.007	.134
	グループ内	6355.619	7707	.825		
	合計	6358.929	7709			
Q15予習復習時間	グループ間	32.449	2	16.224	13.226	.000
	グループ内	9042.187	7371	1.227		
	合計	9074.635	7373			
Q16全体的評価	グループ間	19.276	2	9.638	11.590	.000
	グループ内	6241.111	7505	.832		
	合計	6260.387	7507			
Q17別の科目も受講したい	グループ間	7.319	2	3.660	4.042	.018
	グループ内	6688.867	7388	.905		
	合計	6696.187	7390			

次に、各年度の平均値と標準偏差を掲げる（次ページ以下を参照のこと）。

項目	年度	度数	平均値	標準偏差
Q1 授業の目的	2007年度	2654	4.65	0.67
	2008年度	2548	4.70	0.62
	2009年度	2548	4.66	0.68
	合計	7750	4.67	0.66
Q2成績評価方法	2007年度	2652	4.59	0.73
	2008年度	2546	4.65	0.69
	2009年度	2548	4.60	0.75
	合計	7746	4.61	0.73
Q3 先生の熱意	2007年度	2653	4.72	0.62
	2008年度	2546	4.77	0.58
	2009年度	2546	4.72	0.64
	合計	7745	4.73	0.62
Q4わかりやすい	2007年度	2653	4.39	0.93
	2008年度	2547	4.46	0.88
	2009年度	2547	4.41	0.94
	合計	7747	4.42	0.92
Q5準備よい	2007年度	2655	4.64	0.68
	2008年度	2546	4.69	0.66
	2009年度	2548	4.61	0.77
	合計	7749	4.65	0.71
Q6理解興味の工夫	2007年度	2655	4.50	0.84
	2008年度	2547	4.56	0.79
	2009年度	2548	4.51	0.87
	合計	7750	4.52	0.83
Q7時間どおり	2007年度	2651	4.71	0.64
	2008年度	2546	4.69	0.71
	2009年度	2545	4.65	0.74
	合計	7742	4.68	0.70
Q8質問の機会	2007年度	2655	4.57	0.77
	2008年度	2544	4.62	0.77
	2009年度	2544	4.56	0.81
	合計	7743	4.58	0.78
Q9授業妨害へ対処	2007年度	2651	4.46	0.79
	2008年度	2546	4.50	0.81
	2009年度	2545	4.45	0.86
	合計	7742	4.47	0.82
Q10薦めたい	2007年度	2657	4.46	0.88

	2008年度	2546	4.49	0.87
	2009年度	2545	4.46	0.91
	合計	7748	4.47	0.89
Q11熱意を持って参加	2007年度	2655	4.38	0.83
	2008年度	2546	4.45	0.81
	2009年度	2548	4.44	0.83
	合計	7749	4.42	0.83
Q12シラバス参考	2007年度	2652	3.92	1.21
	2008年度	2540	4.03	1.17
	2009年度	2546	4.04	1.17
	合計	7738	4.00	1.18
Q13授業を中座しない	2007年度	2655	4.49	0.78
	2008年度	2546	4.50	0.81
	2009年度	2547	4.50	0.81
	合計	7748	4.50	0.80
Q14遅刻欠席ない	2007年度	2645	4.36	0.90
	2008年度	2531	4.35	0.92
	2009年度	2534	4.40	0.91
	合計	7710	4.37	0.91
Q15予習復習時間	2007年度	2532	2.29	1.16
	2008年度	2437	2.13	1.05
	2009年度	2405	2.20	1.11
	合計	7374	2.21	1.11
Q16全体的評価	2007年度	2566	4.21	0.94
	2008年度	2470	4.33	0.88
	2009年度	2472	4.30	0.92
	合計	7508	4.28	0.91
Q17別の科目も受講したい	2007年度	2524	4.37	0.97
	2008年度	2424	4.43	0.92
	2009年度	2443	4.44	0.97
	合計	7391	4.41	0.95

以上のデータをもとに年度別の平均値のグラフを示す。

特徴的なのは、2007～2009の平均値グラフの形状が逆V字形を示していることである。逆V字型とは、2008年度の評価が高く、2007年度と2009年度が低い評価となっていることを意味する。これに該当する項目は以下のとおりである。

Q1「授業の目的等の説明」

Q2「成績評価方法等の説明」

- Q 3 「先生の熱意」
- Q 4 「分かりやすい」
- Q 5 「講義の準備がよい」
- Q 6 「理解・興味の工夫」
- Q 8 「質問の機会」
- Q 9 「授業妨害への対処」
- Q 10 「他の学生にも薦めたい」

以上、最後のQ 10を除いて、教員要因である。

ほぼ同じ教員の担当による同じ科目でなされる授業であるが、年度間に評価の違いが現れている。2008年度は他両年度より高い評価を受けている。ただし、Q 10はV字型ではあるが、年度間差は認められない。ほぼコンスタントに4.5前後の評価がされている。

Q 7「時間どおり」は、右肩下がりに評価が落ちている。ただし、2007年度と2008年度間に差は認められず、また2008年度と2009年度間に差は認められない。2009年度が2007年度より評価が落ちている。傾向としては時間厳守に課題があるということであろう。ただし、極端に悪くなりつつあるということではない。

Q 11「熱意を持って授業に参加」は、2007年度より2008年度、2009年度が高い評価になっている。

Q 12「シラバス参考」は年度に沿って右肩上がりである。すなわち、だんだんにシラバスを参考にするようになってきている、事を意味する。少なくとも、2007年度よりそれ以後でシラバス使用が増えている。

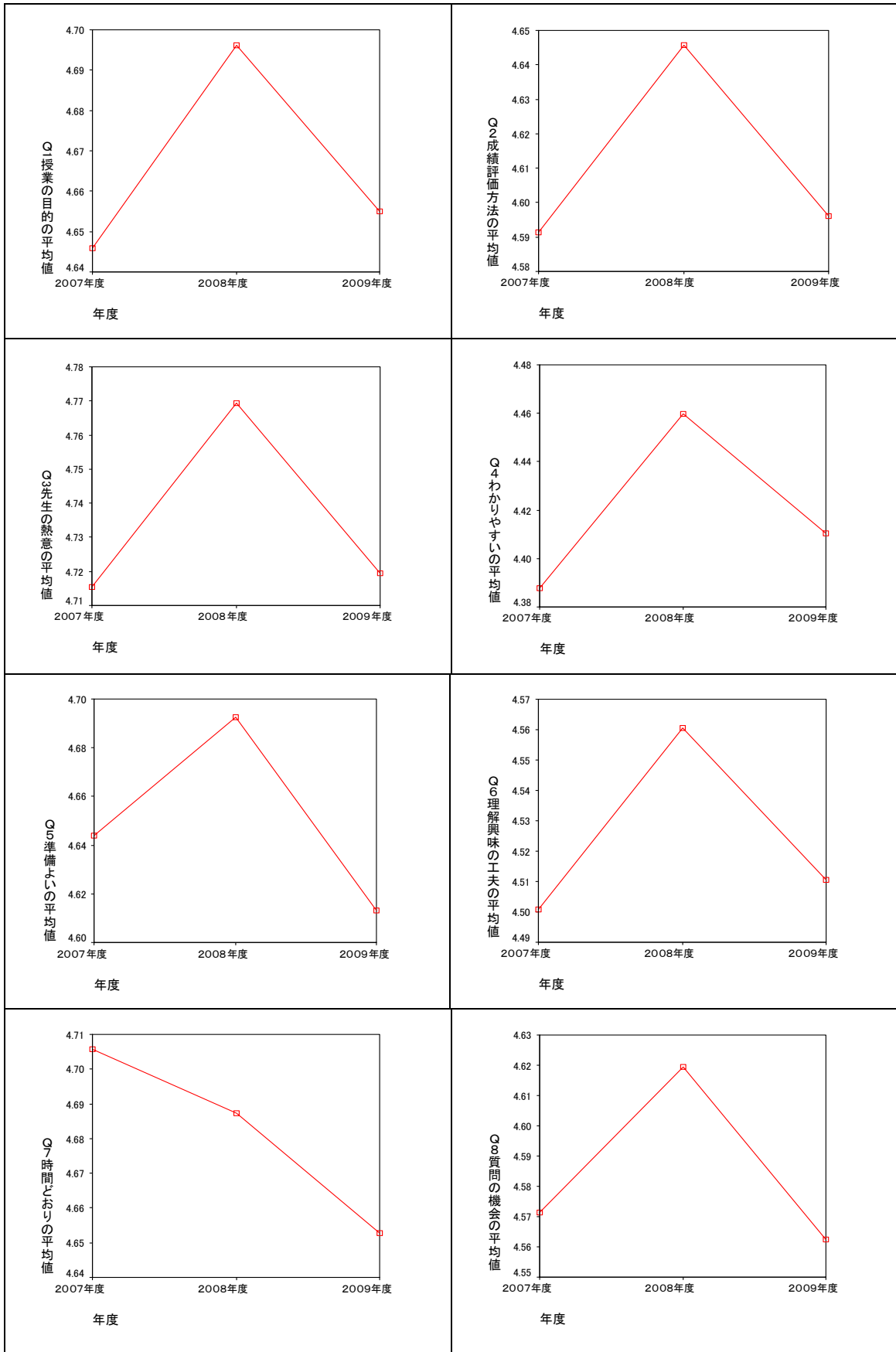
Q 13「授業中に中座しない」は、唯一年度を通じて平均値に差異のない評価項目である。

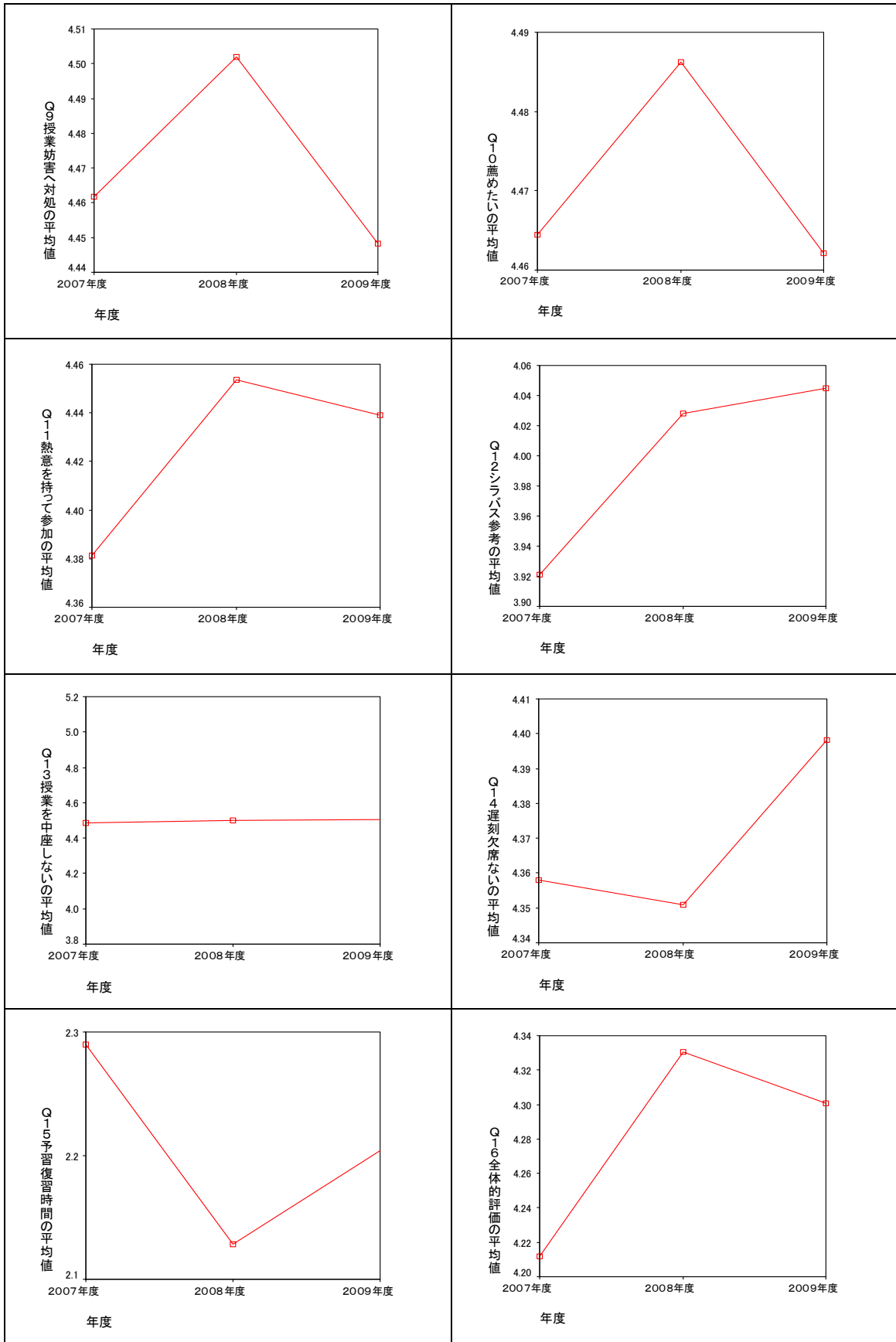
Q 14「遅刻欠席ありません」は、年度間の差異は認められない。

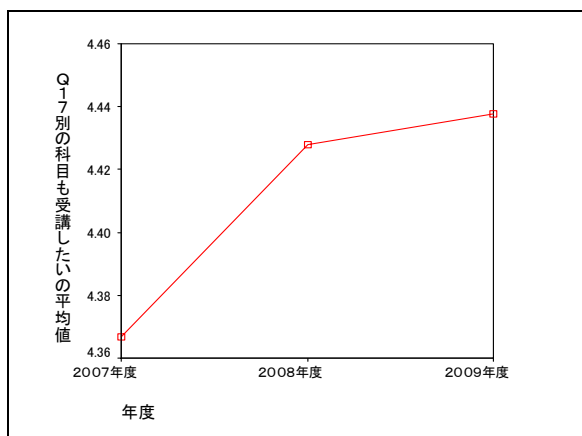
Q 15「週あたりの予習時間」は、V字型となっている。つまり、2007年度、2009年度より、2008年度の評価が低くなっている。いずれの年度も、全体的には30分程度の学習時間である。

Q 16「全体的評価」は、2007年度より、2008年度、2009年度の評価が高い。しかし、急激に評価がよくなった、というほどではない。また、2008年度と2009年間では平均値に差異は認められない。

Q 17「別の科目も受講したい」は、2007年度より2008年度、2009年度の評価が高い。ほぼ右肩上がりの様相を呈しているが2008年度より2009年度が高い評価を得ているわけではない。ただし、どの年度でも4.3以上の評価である。







おわりに

2009年度茎における本学の授業は、教員要因についてはほぼ満足な結果である。5段階評価でいずれも4点を超えている。ただ、授業が「わかりやすい」に関する評価は、教員要因の全評価項目の中で一番低い評価となっている。ここで大学教育において「分かりやすい」という課題は論議する必要があるだろう。確かに、多様な学力の学生集団に対する授業（教育）であるので、配慮すべき問題ではある。

学生要因については、特に学習時間の短さが気になる点である。すなわち、学生がよりよく学習する教育が行われていないかもしれないという懸念があるからである。

過去3年間の評価結果を経年比較したところ、教員要因では2008年度がもっとも高い評価を得ていた。それが何に起因するのか、ここでは分析できなかった。なお、2009年度前期の報告では、2008年度が低い評価となっていた。前期と後期での2008年度の評価の結果には興味深いものがある。

学生による授業評価について

調査期間： 前期 7 月
後期 1 月
調査対象： 全クラス

学生のみなさまへ：

この調査は、本学の教育活動を充実・改善するための基礎資料を得るために、全クラスについて実施されるものです。なお、この調査データはコンピュータにより統計処理され、担当教員に個々の生データを閲覧させることはありません。「成績」に影響を及ぼすようなことはありません。またプライバシー保護については十分留意します。

率直な（真摯な）評価をお願いします。

自己点検・評価委員会委員長
沖縄キリスト教学院大学・沖縄キリスト教短期大学学長

※ 記入終了後、指名された学生が回収します。 提出先：教務課

PART I 設問 1～17 について、評価欄のあてはまる数字（5～1）に○をつけてください。

評価の基準： 5 非常にそう思う 4 そう思う 3 どちらとも言えない 2 そう思わない 1 全くそうは思わない

	評 価 欄
1. 先生は、学期の初めに授業の目的及びこの授業での学生のなすべきことについて明確に説明しました。	5 4 3 2 1
2. 先生は、宿題・試験・成績評価の仕方などについて説明がはっきりしていました。	5 4 3 2 1
3. 先生は、授業について熱意がありました。	5 4 3 2 1
4. 先生の授業は、とてもわかりやすかった。	5 4 3 2 1
5. 先生の授業の準備はよくできていました。	5 4 3 2 1
6. 先生は、学生の理解・興味を深めるためにいろいろ工夫をしていました。	5 4 3 2 1
7. 先生の授業は、時間どおりに始まり、時間どおり終わりました。	5 4 3 2 1
8. 授業でわからないことを質問できる機会や工夫がありました。	5 4 3 2 1
9. 先生は、授業を乱す行為（私語・携帯電話（メールを含む）・居眠り・中座等）に対して適切に対応していました。	5 4 3 2 1
10. 私は、この先生のこの科目を、他の学生や他大学の学生にも受講するよう薦めたい。	5 4 3 2 1
11. 私は、この授業に熱意をもって取り組みました。	5 4 3 2 1
12. 私は、授業の学習にあたり、シラバス（講義要項・学習計画）を参考にしました。	5 4 3 2 1
13. 私は、授業中、私語や携帯電話（メール等）・中座など、授業を乱すような行為ははしませんでした。	5 4 3 2 1
14. 私は、この授業で遅刻・欠席はほとんどありませんでした。	5 4 3 2 1
15. 私は、この授業のために週当たりほぼ次の時間、宿題や予習などをしました。 ※当てはまる数字に○をつける。	
5 (3 時間以上) 4 (2 時間ぐらい) 3 (1 時間ぐらい) 2 (30 分ぐらい) 1 (ほとんどしなかった)	
16. この授業を全体的に評価してください。※当てはまる数字に○をつける。 5 秀 4 優 3 良 2 可 1 不可 0 わからない	
17. 私は、この先生の別の科目も受講したいと思います。	5 4 3 2 1

科 目 名	クラス名 ()			
学籍番号*				男
学 年	1	2	3	4
所属学科	1 英語科 2 保育科			
	3 英語コミュニケーション学科			
	4 科目等履修生			
入試区分	1 一般入試	2 推薦入試	3 AO入試	

* (学籍番号) できるだけ記入してください。

PART II 次の質問に礼節を守って自由に記述してください。

(裏面に記入)

1. この授業のよい点
2. この授業に改善してほしい点
3. この科目や担当者の授業方法について、感想・意見・印象に残ったこと。
4. 学長へ（聞いてほしいこと）

(裏のページへ進んでください⇒)

PART II 次の質問に礼節を守って自由に記述してください。

※この記述は統計的に処理され、この回答用紙を担当教師が直接に閲覧することはありません。

1. この授業のよい点													
2. この授業に改善してほしい点													
3. この科目や担当者の授業法について、感想・意見・印象に残ったこと。													
4. 学長へ (聞いてほしいこと)													